

# 哀歎抄（十八）

## 地獄谷

尾崎 文英<sup>ぶんえい</sup>

夏の訪れとともに  
なつかしい地獄谷の招きにあう  
八月盆の了る頃  
わたしらは必ずここに旅をする  
志賀高原麓の地獄谷  
人生の苦節を乗り越えられた  
竹節春枝さんに会うのをたのしみに

いそいそとこの峽宿に来てしまう  
天高く噴き上がる噴泉  
木造りの延命の湯  
萩、水引草そよぎ  
横湯川その瀬を早み  
おおらかに時は流れ行く  
《観ることに自在なものの眼が  
倦むことを知らぬ眼が  
見守っているのだから》

（『日本短歌協会会員』）

